

＜定例研究会報告要旨＞

第 1763 回 (10 月 6 日)

日本農村における高齢者の自殺について

石 原 豊 美

報告では、主に統計資料を利用して、日本における自殺死亡率の特徴と農村部で高齢者の自殺が多い理由について検討した。

世界的にみると、自殺死亡率が高い国としてオーストリア、ドイツ、スイス、デンマーク、ハンガリーが挙げられ、これらの国では自殺が老衰を上回る。(他方、カナダやアメリカは自殺死亡率が低い。)

日本の自殺死亡率は、比較的高い。世界的に自殺死亡率は、男性において女性よりはるかに高いが、日本では男女差が小さい。また日本では高齢者の自殺死亡率が高く、地域的には郡部人口と農村人口の高い県で自殺死亡率が高い。

日本の高齢者は、外国人の研究者によって「(「赤ん坊」と共に)最大の自由と我儘とが許されている」(R. ベネディクト)、「(男性も女性も)年をとったことを誇りにして」おり、産業化の進展後も地位が低下していない (E. パルモア・前田) 等とされている。日本の高齢者は郡部に多く、農家に多い。親族との同居率が高く、世界的にみても労働力率が非常に高い。しかし、国際比較調査の結果によれば、日本の高齢者は健康に不安を抱く割合も高く、介護にも相談相手にも配偶者を第一に選択している。

高齢者の自殺は、「傷病」を支配的な原因として生起しており、また、配偶関係に欠損がある場合に非常に多い。過疎地域における高齢者の自殺は、伝統的なイエ機能の衰退や高齢者の役割喪失感等と関連して生起しがちである。

日本で農村地域の高齢者の自殺死亡率が高い理由は、次の 4 点に要約される。すなわち、第 1 に、農村地域では医療事情が優れないために、経済や行動上の自由に恵まれず、(場合によっては) 家族が (治療について) 十分な関心を持たない病弱の高齢者の自殺を帰結するのではないかと考えられる。第 2 に、農村部で高齢者は家の農業に従事することを通じて成員としての役割を遂行してきた。病気によってこれに従事できなくなることが、充足感はおろか自己の存在意義あるいは生き甲斐の喪失につながるのではないかと考えられる。第 3 に、農村社会は、勤労の精神が根強いのみでなく集団主義的な価値観に基づいた行動を強く要請しがちな社会であれば、病弱で集団への参加が困難な高齢者は生きながら得ることを苦痛に感じがちになりはしないかと考えられる。第 4 に、日本の (農村) 社会や (農家) 家族が高齢者の自殺を抑止する力を持たないことが関連していると考えられる。農家では経済的な問題に兼業化や出稼ぎ等の方法で対処しており、成人は限定的な条件の下でたくさんの義務を負いがちであるが、病気の高齢者は、家族生活の (経済的な意味での) 担い手としての任務を期待されることも強いられることもない。孤立感からか自殺を選択しようとする時さえ、それを否定されることがない。

ただし、以上についての十分なデータに基づく厳密な検証は、今後の課題として残されている。